巻　頭　言

2023年度の研究成果報告書の発刊に際しまして、一言ご挨拶を述べさせて頂きます。

本研究所の年間活動を考えるに、ここ数年、コロナ禍の影響に触れざるを得なかったところ、昨年度は５類感染症に移行したことで、ほぼ通年我々の活動に影響を及ぼすことは無くなった感があります。むしろ、コロナ禍でオンライン授業、Web会議を余儀なくされたことで、これら技法に精通でき、最近では以前の対面授業、あるいは会議を前提としながらも遠隔でのシステムを併用したハイブリッド型の会合等が出現していることは、コロナ禍の残した効用と思います。海外に目をやれば、2022年２月に開始されたロシアのウクライナ侵攻による戦禍は終着の目途が立たないまま、中東地区ではイスラエル・パレスチナ紛争が激化することで、人的、物的被害拡大のほか、SDGsや本学が目指す社会のサステイナビリティ・持続可能性に対する危機的な状況が増大しています。

このような背景の中、サステイナビリティ研究所の活動として、SDGs関連では昨年度から開始した学生への「SDGs活動推進助成制度」を継続させる他、学生のＥＭＳ委員会からの提案によって新たに開始された「TUES　Sustainability　Week」活動に、サステイナビリティ研究所として監修、協賛し、平井鳥取県知事の講演を含めて学生活動への支援を積極的に行いました。鳥取商工会議所工業部会とともに実施してきたSDGs活動はひとまず終焉とした後、鳥取県の産官学連携のSDGs事業として発展的に拡大することで、本年度からは、本学からより多くのゼミが参画して展開しています。

このような継続的なSDGs活動の他に、本学は、「GX（Green Transformation）」あるいは「脱炭素化」に対する新たな方向性を、令和６年度からの中期計画に盛り込んでおり、この分野に関しても我々サステイナビリティ研究所が主導的役割を担うことになっております。この動きは、昨年、本学と鳥取市らが共同提案して採択された環境省の「脱炭素先行地域プロジェクト」への積極的参画に示されており、本報告に収めた「プロジェクト型研究助成」により本学も学術的にサポートしています。更には脱炭素への取り組みとして、昨年11月に「水素特別シンポジウム」を開催し、九州大学水素エネルギー国際研究センター長、副学長の佐々木先生、一般社団法人クリーン燃料アンモニア協会の村木会長のご講演およびパネルディスカッションを開催、200名を超す学生や内外関係者の参加を得ました。

前述のごとく、サステイナビリティ研究所を取り巻く環境は大きく変化しつつある中、本学内及び鳥取県、鳥取市、鳥取商工会等、本学のSDGs並びに脱炭素化の諸活動に対する関係各所、関係諸氏のご協力に改めて感謝致すとともに、今後も変わらぬご支援をお願いして、私の本報告書の巻頭言に代えさせていただきます。

2024年６月吉日

サステイナビリティ研究所長

田島　正喜